身に菰を被って野垂れ死ぬほどの病身にムチを打っての旅路である。その二ケ月のあとに尼はみまかっている。彼の女の初盆に「数ならぬ身とは思いぞ玉祭り」の句を霊前に捧げた。その翁も二ケ月半後には「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」を残して尼のあとを追っている。誰が考えても二人の仲はただならぬものがある。彼の女が死の床にあるのに、そりを振り切って旅に出た翁の思いは、余人にはうかがい知れぬ深いものがあろう。

自然を友とした漂泊の詩人は孤独に徹することによって、ますます魂をみがいた。人間的な愛情を内に秘め、所詮は「会者定離」と、あきらめたからでないのか。

以心伝心、尼もまた翁の旅立ちをとめることなく静かに夫れに満足して、死についたものと想像される。これをプラトニック、ラブで片付けるのには、あまりにも深い愛情ではあるまいか。道ひとすじとは、こういう酷しさをともなっている。自分は無為無能で、この道を歩き続けるよりほかはない。時には山また山の嶮であろうとも、この道を歩きつづける。前人未踏のトップを切るものは、常に孤独である。孤独を行じつづけるところに、も自分を超えたものとの感想がある。つづいてこその道で、つづなかったら道とは云えぬ。

茶道の元祖千利休も自分の家が丸焼けになった。途方にくれたがその翌日、焼跡から石や瓦を拾いあつめて、釜をかけてこの道を守りつづけた。俗人ならまず、バラックを建ててからの段取りが常識だろう。これを切り捨てたところに、千利休の面目躍如たるものがある。何事に依らずわれわれが初願したら、一歩踏み出したら、如何に雨が降ろうと嵐が吹こうと一途にやりつづけるべきことだ。

恒に初心にかえることを念頭におく時に於いて虚空法界もつきなんと思われるが、同時に秋が更けゆくにつけ、わが願いもかくの如く何かしら心がうずうずしく覚えるようだ。

この稿の終る頃、偶然にも大丸より近世の稀大の陶工、土と炎の中に命を求めつづけ捧げて来た、河井寛次郎先生の回顧展の案内が舞い込んだ。見るとその片鱗のことばの中に先生としての人生哲学が織り込まれていて驚きの眼を見張った。

「この世は自分をさがしに来たところ
この世は自分を見に来たところ
新しい自分が見たいのだ——仕事する
何と云う大きな眼、この景色を入れている眼
追えば逃げる美　追わねば追う美
ものを買って来る　自分を買って来る
何もない、見ればある
道を歩かない人、歩いたあとが道になる人
見られないものばかりだ　見る
されないものばかりだ　する
きめられたものはない　きめる

（寛）

風呂吹きや古代の住居頭出す

（編）

※18号より（昭和四十八年一月一日発刊）

船鉄交換と播磨造船所の史実

立花　實

第一次欧州大戦（一九一四）勃発後米国は鉄鋼の輸出を全面禁止した為世界的な船舶不足と成っているに吾国造船所はなす術もなく閉鎖寸前かと云われた時、私達の大先輩金子直吉支配人が川崎の松方幸次郎社長、浅野の浅野総一郎社長等と計り、鉄鋼材の供給を受け貨物船を建造して米国に返す所謂船鉄交換条約を制約し一九一八年五月、神戸の常盤花壇で米国大使を迎えて歓迎会を催し此席でモリス大使は「金子直吉と云う人の公正な英智と忍耐力で本条約が成立した、この様な人物を市民とする神戸市否日本の諸君に心からの祝意を表す」と絶賛されたと云うことであります。このお陰で播磨造船所も活況を戻し「イースタンキング号」を始めとして五千噸から一万五千重量噸の貨物船計四隻を建造して米国に引渡したと云うことであります。

この播磨造船所こそ鈴木商店が一九一六年（大正五年）地元相生の唐端清太郎氏から継承し(株)播磨造船所として発足した鈴木の造船所であります。

そして一九二〇年英国ロイド船級協会の指導を受け吾国最初の大型タンカー満珠丸、橘丸及干珠丸(九千重量噸)を建造し、海軍から砲艦勢多。堅田の建造下令を受け内外の内外の評価得ていたのでありますが、欧州対戦後の不況と経済界のパニックと云う社会不安の混乱が起き、鈴木商店が外米輸入の買付をしたのを国内の米を買占めているかの様な某新聞の報道の為、未曾有の米騒動が起き、無実にも鈴木商店は焼き打ちの災難を蒙ったのであります。予想外の情勢を考慮して一九二一年二月経営企業全般の整理を断行し此時播磨造船所は神戸製鋼所播磨造船工場として併合さした訳であります。そして順調な推移の後昭和を迎え所謂全解禁の金融恐慌の嵐を受け加えて海軍軍縮の影響で重工業界全般不況と云う難局到来と成った為、本社を頼みとする依頼心を断ち人心を一新する途と一九二九年十一月播磨造船工場の分離独立を決め、取締役社長松尾忠二郎資本金五百万円という(株)播磨造船所が発足したのであります。

然るに吾国経済は全解禁後の影響で特に海運造船業界の不況は深刻を極め、播磨造船所は給料の遅配欠配を余儀なくすることと成りあわや工場閉鎖に成るかと案じた一九三〇年中華民国海軍の巡洋艦二隻を受注すると云う、天裕に恵まれ社内は勿論町を挙げて喜んだことでありました。造船各社何れも渇望の時三菱川崎と云う艦艇建造実績の両社を擢いてのこととて播磨造船所は、一躍有名に成ったのであります。これは松尾社長の人徳が当時の名倫会の関係で時の海軍軍会部総長伏見宮殿下の御心に通じたお顔と云うことでありました。

戦時中は海軍管理工場として艦攻本部の負託に答え陸軍からも特命を受けタンカーあきつ丸を陸軍唯一の航空母艦に改装して御奉公したことであった。

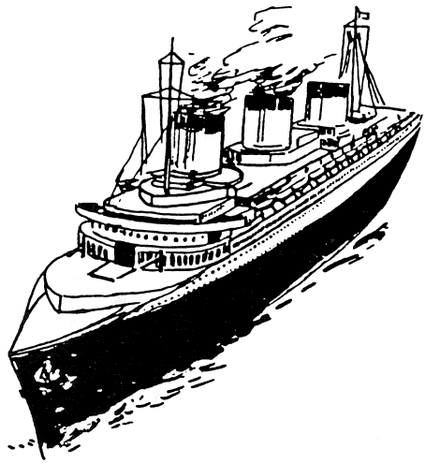
然るに終戦後には各種漁船の建造と陸上鉄鋼関係で経営を続け乍ら

将来を期し造船技術特に電気熔接技術研究に東大、阪大工学部教授陣の協力を得てその研究費をいとわず鋭意研鑽に徹した結果、一九二五年世界始めての電気熔接構造の大型タンカー日栄丸（一万三千重量噸）を完成し造船技術の歴史に大きな記録を成し遂げたのであります。そして此大型タンカー輸出ブームを迎え久々に吾が世の春を謳歌する好況期が続いた訳でありますがこの反動の谷は深く、好況の時流に拡張した設備其他の整備転換のため第一銀行融資を願い出た〃現状の儘での単独融資は困難、親会社の神戸製鋼所と合併をと慫慂されたので、播磨の六岡社長は急拠神戸製鋼所の浅田社長を訪れ、この経緯を語り第一銀行の意向を話し復帰合併を依頼した〃、浅田社長は何の依存もなく快諾され、三十一年振りに親会社に復帰すると云うことに成ったのでありました。ところが其の二日後何の前振れもなく神戸製鋼所の市川専務、曽我野常務、湊取締役何れも経理担当役員の三名が播磨の東京本社にやって来て「先日浅田社長が一応受諾した合併の件、当方常務会で協議の結果残念乍ら否決されましたので悪しからず」と云う口上なんです。仮初めにも一社の社長と社長が会談して成約した大きな問題をこの様なことで、親会社が子会社を見放すとは……。前社長田宮嘉衛門さんが御存命だったらこんな不幸な始末にはならなかったことと痛感したことであります。鈴木傳統の歴史から憶うと真当に取り返しのつかない残念なこと、店負は皆わが家族と云う、われ朝食は会社に来てから一緒に攝り、還暦まで勤めたものには家紋のついた紋付を下さると云ったお家はんの温い心遣いで培かわれて来た末裔がこんな悲運を蒙るとは。

第一銀行の酒井頭取は御自身で石川島造船の土光社長に斡旋下され、早速両社経理担当役員と帯同部員で双方の資産及経理内容全般の審査に日時を設け両社社長の決裁で土光社長の潜在的資産評価を考慮し対等条件の合併にとの発言で合意し、六岡会長、土光社長、役員は各九名宛計十八名と云う徹底した合理化経営の新会社にと宣言して（株）石川島播磨重工業が発足、吾が国始めての大型企業合併の第一号と成ったのであります。

其二年後一九六二年世界海運好況の波にのり（株）石川島播磨重工業の相生工場は一九六四年迄連続三ケ年進水総噸世界一と云う大記録を残す偉業を為し会社業績飛躍に大いに寄与したのでありました。この相生工場の煉瓦建倉庫の壁高く昔ながらの米マークの家紋が残って居るのですが此米マークを眺めて来た。

昔の仲間が三水会と云うＯＢ会で毎月顔を会わせ夫々の趣味談義や昔ばなしに花を裂かせているという現状であります。



辰巳だより会

本部新年例会報告

平成九年度　辰巳会　新年例会出席者名簿

平成九年一月十六日㈭日
於・神戸「第一樓」
（敬称略）

安東　浄　間野　玉枝
井上好正　岩崎由佳子
小野晶子　坂東みどり
金子孝蔵　武藤　秋
金子貞子　藤田健作
金子峻松　下重男
東條佳子　森　好子
東條賢子　柳田辰巳
北尾素子　柳田光子
木村毅ヨ　柳田政江
神保カ　横田周作
鈴木治雄　横田よしこ
高　明　金野和夫
畑　薫　川崎雅子
幸
計二十八名

本部　秋季例会

平成九年十一月十八日(火)
宝塚ワシントンホテル『島屋』で
懇親会と宝塚歌劇の観劇

今回の懇親会の会場は、阪急電鉄宝塚駅前にある、旧宝塚温泉の旅館島家が都市開発によりホテルとなった場所で開かれました。

正午に二十名の出席者のもと開催され、鈴木会長より『東京支部長の植田三男様が御亡くなりになり、会員数が減る中皆様にはご健康に留意されて生活を楽しんで頂きたい。また会員の方々のお歳を考えて今回の様な催しにしました』とのご挨拶がありました。次に松下幹事より観劇に関する説明があり、引き続いて木下清三郎様のご挨拶とご発声で乾杯して宴会に入りました。料理はミニ会席を囲み、歓談の花が咲きました。誠に楽しい一刻を会話で盛り上がったのですが、劇場へ移動する為午後二時過ぎにお開きにしました。

兵庫県南部地震後きれいに復旧・改装された宝塚大劇場へ通ずる『花の道』を一同劇場へと向かいました。途中井上好正様が転倒され、大事を取って帰宅されましたが、その後の御連絡で心配には及ばぬとのこと、蛇足乍ら報告しておきます。

当日の演目は、星組の『ダル・レークの恋』で、小野晶子様のご好意により、二階正面最前列寄りという最上の席で、殆どの方が約三時間楽しまれ、午後六時三十分散会しました。

辰巳会本部秋季例会出席者

平成九年十一月十八日㈫
於　宝塚ワシントンホテル「島屋」
宝塚歌劇観劇
（五十音順・敬称略）

安東　浄　武藤　秋
安東　恒子　松下重男
井上好正　森　好子
大谷淳子　柳田辰巳
鵜崎淑子　柳田光子
小野晶子　山本秀子
金子孝蔵　河野芳子
木下清三郎　鷲尾千鶴子
鈴木治雄　金野和夫
坂東みどり　川崎雅子
合計二十名